

稲荷日宣著

「法華經一乘思想の研究」

古田和弘

なかなか豪華な書物である。学術書としては、これほどの書物は近年あまりお目にかかれない。最初にそのことに驚かされるのだが、著者の御経歴をみると、何ということなしに理解できそうな感じはする。

まず、巻末に附せられた「著者略年譜」によって、著者について紹介すると、稲荷日宣師は、明治二十一年のお生まれということであるから、当年、八十七歳を数えられるわけで、まさに斯界の長老であられる。日蓮宗大学（現、立正大学）を御卒業になり、同大学研究院を経て、宗命により内地留学生として東京帝国大学文学部印度哲学科に学ばれ、島地大等・木村泰賢の両碩学の膝下にあつて「法華經成立史の研究」を専攻されたということである。大正末から昭和初年にかけては、東京池上の池上宗学林、及び千葉県中山の法華經寺学林において後進の方々の指導に当たられた。その後、岡山県の最上稲荷山妙教寺

に稲荷山学林・最上図書館・最上稲荷山佛教文化研究所をそれぞれ創設され、それらを主宰しておられる。かたわら、立正大法華經文化研究所の特別所員でもあられ、昭和四十六年、立正大学から文学博士の学位を受領しておられるとのことである。巻末にはまた、昭和二年から三十八年までの間に執筆された研究論文が、未刊既刊を合わせて十四篇列挙してあるが、その題目から察して、法華經を直接の課題としたものが大半を占めている。以上の事柄から、この書の著者の学問上の御関心の傾向と、御活躍の範囲とがほぼ推察されることである。そして、本書は半世紀余の永きにわたつて積み重ねられてきた研究成果をここに纏められたものであつて、わずかな歳月のうちに成つたものではないことが知られるのである。

本書は、次下に紹介するように、法華經全巻の構造を分析し、この一經の中心課題である一乗と三乗の問題、そしてその発展的教義学説である三車・四車の対立について検討を深めつつ、法華經の成立史を本格的に論じ、それによって法華經の根本思想を明らかにしようとしたものである。全篇を通覧して感じられることは、著しく着実で実証的な論究の方法が試みられていることである。法華經という經典は、著者にとっては、もともとと格別の意義をもつ經典であつたわけだが、著者が属しておられる伝統の法華教学においては、いうまでもなく、經の一々の文々がすべて金口の所説であり、天台五時教判が一往妥当なる法華經観でもあり、何よりも、日蓮が発見した法華經の眞精神が至高の価値を有するものでなければならぬ。ところが、本

書の巻頭の「序説」によると、ビュルヌフヤケルンといったヨーロッパの学者による近代の科学的な法華經の成立史的研究が進み、翻訳が成功をおさめたために、既成教団の宗学者たちは、「驚天動地の思い」を起し、師資相承の教学を信する人々の間では、それら新しい方法による研究の成果が「破天の魔説」と受け取られたという(本書五頁)。この間の事情が、「序説」には至極客観的な叙述を以て語られているけれども、恐らくは、これは著者御自身のうちにも起った動揺ではなかったかと思われる。そのとき、「学問とは何か、研究とは何かを真摯に追求するとき、より真なるものを発見することができるのであって、佛典研究もその方法論を採用することこそが、純粹な学問的態度である」(五頁)として、法華經成立史の科学的な研究に取り組まれたように推察される。「遠慮会釈もなく佛典を組上にして研究しようとする」(同上)如き時潮に耐え忍び、これを克服することが著者の秘められた抱負であったかも知れない。そして、「日本の法華經成立史研究はまだ日が浅いが、形態と思想の内容とから成立史論が完成したときこそ、待ちあぐんだ本地の春が訪れる」(六頁)という希望と、そもそも法華經は、「尊い殉教者の筆のほとばしり」(同上)であり、また「理を尊ぶ哲人の書でもなく、情に流された痴人の文でもなく、ブッダの真髓、ひいては、小乗・大乘の佛教教理を充分体得した人によって編集されたものであることは疑いない」(同上)という信念のもとに、著者の法華經研究が進められてきたようである。その場合、「これからの法華經研究は自明の理と考えられているよ

うな術語・教理・譬喩・因縁であっても、その成立の背景を把握することなしには完全のものとはいえない」(同上)と断言される。かくして、「私は法華經の中で自明とされているものを未明とし、經典史の中に流れる未明の歴史を明らかにして、法華經の自明への疎通を計りたい」(同上)という決意が表明されることとなる。

二

この書の本論は次のような九章から成り、これに四百頁余の紙幅が費してある。

第一章 法華經の科文から見た一經の分段と重要視された品々

第二章 近代の法華經成立史論

第三章 法華經注解者及び近代研究者の一乗説

第四章 アゴン經に説く一乗の語義

第五章 アビダルマにおける一乗説の有無

第六章 初期般若經における一乗

第七章 維摩經における三乗

第八章 華嚴經における一乗

第九章 法華經における一乗・三乗

以上に見る通り、近年の法華思想の研究においては稀に見る壮大な構想が本書には描かれている。どの一章をとってみても、法華經について考える者ならば、誰しも一度は思いをめぐらせる課題でありつつ、容易に手出しのできない主題ばかりである。

しかもこれが資料に密着した形で論じられているところに、外連味のない正攻法を以て当られた著者の実直なお人柄と自信のほどが感じられるのである。以下、紙数の許す範囲内に圧縮して、各章の所論を紹介することとしたい。著者の真意を誤って伝えることがなければ幸いである。

まず第一章には、その第一節に「法華經の講經者と注釈者」と題して、大智度論一百卷に合計三十五回引用されている法華經の十五品の品名と各品からの引用回数とが、智度論の巻次を逐って図示され、またこれとは逆に、引用された法華經の各品が、智度論のいずれの巻に何度引用せられているかが一目にして判明する図表も掲げられている。こうして、龍樹が重視した品々を探ることにより、龍樹の法華經觀を浮彫りにしようというわけである。その結果、龍樹は大品般若經を積するに当って法華經の中では方便品を最も重用したこと、そして龍樹が阿羅漢の受記作佛の教説に法華經の特色を見出していることを指摘される。智度論における法華經の引用の実態を図示してある点は、学者に利便を与えるであろうが、これだけを以て龍樹の法華經觀が語られていることにはいささかの当惑を禁じ得ない。つぎに、法華論に見られる世親の法華經解釋の態度が、吉藏の法華論疏を手がかりとして略説され、世親が重要視した品々が指摘される。続いて、法華經の翻訳者・講經者・注釈者として何らかの形で記録に名をとどめている三国の先哲百十八人の名を列ね、また法華經の注疏の現伝するもの、及び存在が伝えられるもの、百二十二篇の疏名が列挙されている。実に克明な作業の成果で

ある。ただ、名を列ねて法華經研究の偉容を誇示するのみで、これがこの書の論述に有効に利用せられていないのは何としたことであろうか。第二節、「鳩摩羅什門下の科文」には、道融・僧叡・道生が立てた科文が図示され、第三節「五大家以前の科文」には、道朗・龍光・慧龍・玄暢・僧印の科文が、第四節「五大家の科文」には、法雲・智顛・吉藏・窺基・戒環の科文が、そして第五節「日本における科文」には、聖徳太子・最澄（但し独自の科文は存しないことが報告してある）・空海・円珍・日蓮の科文が、それぞれ図示されたり、簡潔に紹介されたりしている。確かに分科は、經典を如何に解釈するかという中国および日本の佛教に特有の研究法であって、これによって科文製作者の法華經觀を窺い知る手がかりは得られるであろう。従って、諸師それぞれの分科の論拠を探ろうとして、多くの研究者がそれぞれの角度からやっきになって思索をめぐらせる問題点の一つなのである。しかし、そのことは本書の主たる関心事ではないらしい。科文は「暗黙の中に法華經の成立に対するさざやぎと聞くことができる」（七頁）という立場から、中国・日本の諸師が「法華經の中心思想をどのような観点からとらえ、法華經の品々をどのように取扱ってきたかを知る」（六七頁）ことによつて、印度における法華經の成立史を洞察しようとすることが目的となっている。云われる通り、それらの諸師の分科を参考として、更めて法華經の所説を細心に吟味すれば、類型的に法華經の構造を明らかにし、それによつて、漢訳經の側から見る成立史の解明を試みる事ができるのである。本書ではこ

の問題に格別の努力が払われているように見受けられるが、結局のところ、この歴大な作業によって導き出された成立史に関する一往の結論は、方便品から授学無学人記品にいたる八品が最古層をなし、次に勸持品から如来神力品にいたる九品が第二期の成立と想定することであった。しかしこれは、既に松本文三郎・常盤大定・本田義英・吉田龍英・布施浩岳・横超慧日・紀野一義といった諸学者がほぼ同様の手続きによって検討された結果に対して更めて賛意を表明するにとどまった。いま、科文研究によって成立史を論ずることは「早計と批判されるであろうか」(七頁)と熱っぽく問いかけられても、何とお答えしよいかのかわからないのである。因みに、第二章において、ビュルヌフ氏の長行早期成立説、ケルソ氏の偈頌早期成立説に端を発した近代の法華経成立史論の諸説が紹介され、そこに上記の諸氏の説が要約されているのである。

さて、とにかく、科文の研究により、法華経の最古層の中心的教説は、方便品を中心として説かれる開三顯一の一乗思想であることが判明したというわけで、一乗と三乗の問題を考察することが法華経の根本主張を理解する上に必要となり、これを取り上げて論じたのが第三章である。三乗に関する龍樹の用語例を智度論の中から摘出し、大正大藏経によってその箇所の数が見当らず、菩薩乘と称してもよい場合に「佛乘」という語を用いているので、龍樹は、菩薩乘と佛乘とを同視する三車家に属すると結論される。同様に、世親についても極く簡略な検討を

加えて、やはり三車家としての世親の一乗観について解説が施してある(第一節)。続いて、中国における道生・法雲・智顛・吉蔵・窺基の一乗に関するそれぞれ基本的な主張を極く簡潔な形に整理して提示してある(第二節)。そして次に、「近代の一乗説」(第三節)として、松本文三郎・吉田龍英・木村泰賢・宇井伯寿・布施浩岳・鈴木宗忠・勝呂信静・坂本日深・平川彰・藤田宏達・横超慧日という十一人の学者による一乗についての学説の論点を要約して紹介してある。ただし、それらの学者が一乗説についてどのような研究を積み重ね、どのような視点に立っているかという学説の全容をとらえようとしたものではなく、十一人の学者がそれぞれ一、二の著書の中で、結局のところ、三車説を支持しているか、それとも、四車説に立っているかを見定めようとしたものである。かくして、道生・吉蔵・窺基・吉田龍英・木村泰賢・宇井伯寿・布施浩岳・藤田宏達・横超慧日といった人々が三車説に立ち、法雲・智顛・松本文三郎・鈴木宗忠・勝呂信静といった人々が四車説を主張したと結論している(三九頁)。中国の諸師が三車家か四車家かという議論は、既にさまざまな形で多くの学者によって尽されているところであって、それら諸師が何ゆえにいわゆる三車説を唱え、また四車説に立つこととなったのか、その発想の根拠とそれぞれの一乗思想がもつ論理構造を解き明し、それが中国佛教史においても意味を検討することが、今や課題となっている。そもそも、三車説か四車説かという問題は、一乗についての思想の種々相からすれば、極めて象徴的な話題であるに過ぎない。従って、

三車説か四車説かを問うことは、基本的に配慮すべき事柄の一つではあるが、しかし、そのことだけが問題になるならば、もともとこの問題の設定が明快ではあっても、単純にすぎはしまいか。その上、南北朝から隋唐の時代の諸師と同じ次元で、近代の諸学者の学説が三車か四車かと論じられるのは、何とも唐突な印象を抱かすにはいられない。

三

さて、このように、法華經の成立史論に検討を加え、その最古層の中心課題と目される一乗説に関する古今の学者の理解を整理してこられた著者は、次に、法華經に至るまでの一乗義の変遷を教理史の上であとづける作業にとりかかられる。それが第四章以降、第八章までの論述である。まず第四章に、原始佛教における一乗義が論じられるが、これには、阿含經中における一乗の用語例を四阿含および Pali Nikāya 中に検索するという手法がとられる。果して、阿含經においては、涅槃への唯一の道としての一乗 (ekayāna) が説かれ、四念処等を指すのであるが、この語が後に法華經において発展を遂げた一乗 (ekayāna) の源流であると想定しておられる。

ついで、第五章に取り上げられるように、これが阿毘達磨論書になると、一乗については阿含經の一趣道の意味をそのまま継承するにすぎないけれども、阿含經においては声聞・緣覺・佛の三乗であったものが、これに菩薩の概念(但し本生の菩薩)が加わることになり、大乘佛典にいう菩薩への過渡的段階を示

しており、そのことが ekayāna から ekayāna への推移を暗示していることを指摘されている。これには主として大毘婆沙論が用いられている。

こうして、論究は大乘の主要經典へと移ってゆくが、第六章では、右の如き菩薩像が般若經において次第にふくらんでゆく過程を小品系と大品系とに分け、それぞれ各種の異訳の所説を比較しつつ論じてある。そして、声聞・緣覺・佛の三乗が、しばしば声聞・緣覺・菩薩の三乗として語かれることを例示し、菩薩乘なる語が大乘とか一乗とかの語と殆んど同義語となっている点を指摘される。なお、附表として、光讚般若經・放光般若經・摩訶般若波羅蜜經・大般若波羅蜜經・梵本二万五千頌般若に見られる一乗と三乗に関係する用語の対照表が示してある。

第七章には、上述の如き經過を経て高潮してきた菩薩思想・大乘思想を維摩經に眺め、その漢訳三本と西蔵訳とにより、そこに説かれる三乗の意義と大乘の意義とが論じられるが、漢訳三本から、「乗」のつく語を収集し、これによって、維摩經においてはもはや菩薩乘・佛乘を含んだ形の三乗を説かなくなり、声聞乘・緣覺乘・大乘の三乗が説かれるようになった事実を指摘しておられる。

そして、第八章には、華嚴經のうち、成立が早いと想定される十地品と入法界品とについて、一乗と三乗の問題が論じられるが、三乗について、十地經も入法界品もともに、声聞・緣覺・大乘の三乗が説かれること、一乗については、十地品の第九善慧地に至って突如として一乗の語が検出され、入法界品におい

でも一乗が説かれていることなどを、注意しておられる。そしてこれらとともに、法華経方便品の一乗説の影響であろうと推定される。この章にも附表があり、十地品については、漸備一切智徳経・十住経・六十華厳・佛説十地経・八十華厳・梵本における「乗」のつく語を対照した表を掲げ、入法界品については、同じく「乗」のつく語を六十華厳・八十華厳・四十華厳・梵本の各本から摘出して比較対照し、これにかなりの頁数を費してある。

さて、最後の第九章には、法華経における一乗と三乗とが語られる。いうまでもなく、著者が最も力を注がれた章である。まず最初に、一乗・三乗・大乘・小乗、あるいはこれらに関連する語を、妙法華・正法華の漢訳二本と、ケルン・南条本・ベトロフスキー本の梵本からそれぞれ検出し、対照表にして提示してある。ついで、これをもとに、序品以下の各品におけるこれらの用語に検討が加えられる。中でも、方便品と譬喩品とについての吟味が詳しい。方便品では殊に、「諸佛両足尊は、法は常に無性にして、佛種は縁より起ること知り、是の故に一乗と説く」という偈について、「縁起を一乗と説くのだ、というこの一偈があつてこそ、法華経の中心教説たる一乗は、とりもなおさず、根本佛教以来、つねに一貫して佛教の根幹をなしている縁起の換え言葉であることが堂々と明示され、まさに法華経が佛教の本流に棹さすものなり、と主張し得るのである。このような見方が、古来の中国、日本等ではあまりなされてない」(三五三頁)と云つて更めて慷慨しておられるところが注意

を惹くことであろう。三乗については、成立の時期の早い方便品では声聞・縁覚・佛の三乗であるが、譬喩品に至つて、妙法華を除いた諸本に、佛乘に代つて菩薩乗の語が見られることから、譬喩品において、佛乘から菩薩乗への転回が果されたという見解を示しておられる。また、方便品の「十方佛土の中には、唯一乗の法のみあり、二もなく三もなし」という偈は、梵本によれば、二と三とは第二と第三を意味するので、菩薩乗の外に佛乘を認めることは不可能となり、梵本に徴する限り法華経は三車説というべきであると強調される。また、譬喩品の火宅喩において、偈頌の中では、羊・鹿・牛の三車を挙げ、これに対応する長行の中には、牛車とは別の大白牛車のあることを思わせる文があるので、これが三車・四車の論争の因由となつたとされるが、著者によると、長行よりも偈頌の方が成立が早いと見るのが妥当であつて、このことから、やはり三車説が法華経の本来の説であるとし、「時間・空間的に四種の車が並存すると見るのは、法華経の解釈としては断じて誤りである」(三六七頁)と論断される。方便品・譬喩品以外の各品の一々についても、著者は事こまかに検討を加えておられるが、あまりに仔細にわたる事例が多いのでここでは逐一紹介することは省略したい。

巻末に、都合十頁に及ぶ「結語」が置かれ、本書全体の要旨を順次に章を逐つてまとめてある。本書は、その大部分が資料の列記や用語例のこまかい比較や対照に費されているので、読者は、著者の論点を見失つたり、主張の方向を計りかねたりし

て困惑することがしばしばであろうが、この「結語」によって、本書の論調が鳥瞰できることであろう。

四

以上に述べてきたことは、本書の内容を極く大雑把にとらえて紹介してみたに過ぎないが、この書の構成を更めて見直してみると、著者が首尾一貫して問題にしてこられたことは、法華經に説かれる一乗と三乗の教説が、これを言い換えると三車説となるのか、それとも四車説と見られるのか、ということであったことが知られるのである。本書の前半において、法華經の成立史を論じて、最も原初的な形態を把握しようとされたのは、専ら法華經の根本教義が三車説であることを論証するためであった。また後半部において阿含經から法華經に至る主要經典によって一乗と三乗の意味するところを検討されたのも、佛教は本来、佛乗と菩薩乗とを別視しない三車説であり、法華經はまさにその三車説の教義を最高度に發揮せしめた經であることを証明しようとしたものであった。従ってこの論理からすると、四車説というものは、佛教の正当の見解ではなく、法華經のみならず、広く諸經典を参照したならば、到底成り立ち得ない説であるということになり、四車説を主張した天台智顛などの見解は、佛教の本義に背いた誤解の所産であるということになる。この判定の当否は今では問わないとしても、そのような判定を導き出す過程の論証は必ずしも適切であるとは云い難い。智顛が四車説に立った論拠と、本書において四車説を批判する論拠と

では、まるで次元が異なるからである。しかし、それにしても、天台法華學の流れを汲む立場にあられる著者が、四車説を誤謬なりと断定されるには、相当な勇氣と根拠とが必要となつたであろう。まず、著者の學的情熱の程が察し得られるというものである。勝手な想像が許されるならば、ひしひしと押し寄せてきた近代學の波に洗われた伝統の法華教學において、著者にとっては、三車か四車かという一乘思想の根幹をなす問題が象徴的に大きな課題となり、それが著者の情熱をかき立てたのかも知れない。近代學からの批判に遭つて、後込みして眼を逸らせたり、居直つて對話を打ち切つたりする風が今なお横行する中で、この書の著者の誠意ある応対は絶賛を博して然るべきと思う。このとき、「本地の春」を期して著者が選ばれた方法は、「できる限り論証の蔽密を期する」(三九五頁)という科學的な方法であつた。本書の論調が宗教的もしくは思索的であるよりも、まず従来「自明とされたことを未明として」、龐大な資料の収集と陳列に努められたのも、偏見により真なるものを実証するためであつたのであろう。これに要する労力は大変なものであつたに相違ない。

大変な労力を払つて資料が提出されているのだが、必要かつ充分なる資料が適切に提示されているかということになると、これはまた別問題で、本書にはその配慮に欠けるところがある。しかも、著者が研究の掌控えとして机辺に備えておかれるべき性質の引用資料や注記などが、料理もされずに生のまま並べられている感じを受ける場合がしばしばある。佛教學の近代化の

ためには先ず科学的事証性を重んじなければならないが、科学性そのものが安易に自己目的化すると、極端な場合、このような現象が起こるようである。また「自明のことを未明のこととして」、基本から一つ一つ点検し直すことを目的としたこの書の中に、逆に、未明のことが自明のこととして扱われている例が随所に見られるのは遺憾である。一例を挙げると、智度論は疑いもなく龍樹の作として無条件に取り扱われている如きがそれである。智度論の作者が事実上、何人であろうとも、漢訳の論書としての意味が別にあることはいうまでもない。従ってその所論を直ちに龍樹に帰せしむるのはなおさら早計である。また、一乗・三乗などという重要な成語を比較したり対照したりする方法が多くとられているが、この種の言葉を比較したり、教え上げたりする場合は格別の用心が必要である。例えば同じ一乗という語にしても、それが単なる数字や記号でない以上、

作者なり訳者なりが、どのような心の営みをもその語に託しているかを吟味しなければならず、文中におけるその語の重量と語勢の方向とを正確に測定する努力が試みられなければならないであらう。

本書を読み終えて、具体的な事項に関して種々の欠点を指摘したい意気込みを覚えたことでもあったが、長老の述作を前にして、何となく気恥しく、気後れしてしまった。資料批判に関するいくつかの欠陥や推論の安易さが予め承知されている場合には、この書は、筆者の如き法華学の初学者にとって、至便の案内書となることは確かである。若輩の無遠慮、御寛恕を乞わねばならないが、自戒の意味も籠めて所感の一端を記した次第である。

(昭和五十年四月、山喜房佛書林刊、B5版、一二、〇〇〇円)